

ANTENNA

中部大学広報誌 NO.116 2013.6 広報部

〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200

TEL 0568-51-1111

<http://www.chubu.ac.jp/>



春のオープンキャンパス2013 (4月20日)

CONTENTS

■平成25年度教員総会 飯吉厚夫理事長あいさつ
山下興亜学長あいさつ

CLOSE UP ■語学支援の新たな一歩に向けて ◎語学センター副センター長 教授 小栗成子

■硬式野球部のこれまでとこれから ◎硬式野球部顧問 工学部長 教授 松尾直規

NEWS SPOT ■平成25年度入試総括 ◎広報部長 田中喜夫

■平成24年度就職総括 ◎キャリアセンター長 教授 佐藤 厚

ACCADEMIA ■大学教育研究センター副センター長 教授 寺澤朝子 ■建築学科 教授 内藤和彦

新刊紹介 ■名誉教授 鶴田正道 ■生命医科学科 特任教授 伊藤康彦

私の1研 ■肥満の研究 ◎食品栄養科学科 准教授 甲田道子

私の授業づくり ■「Why?」私の指導戦略 ◎英語英米文化学科 准教授 グレゴリー・キング

コラボ ■学内清掃キャンペーンを超えたC.U.P.の取り組み ◎学生支援課 原田智之

My Note ■特別目的事業体を用いた取引と実体的裁量行動 ◎経営会計学科 准教授 威知謙豪

語学支援の新たな一歩に向けて

語学センター副センター長 教授 小栗成子



2013年4月3日、本学19号館2階に誕生したCALL教室(192D)で、学内外のゲストを招いたオープニングセレモニーが行われ、翌4日の春学期授業初日から運用が開始された。



オープニングセレモニー

語学センターの語学教室は、2009年度に更新された20号館4階の語学メディア教室に加え、19号館2階のLL教室4部屋が、CALL (Computer Assisted Language Learning) 教室1部屋、LL教室1部屋、多目的演習室2部屋に生まれ変わった。

語学センターとLL

中部工業大学の開学から13年目の1977年4月、語学センターの前身である外国語研修センターが20号館に誕生した。本学のマルチメディアを活用した語学教育の歴史は、20号館5階に設置されたLL教室2部屋(SONY LL-9・各54席)から始まった。



外国語研修センター当時のLL教室

第二次世界大戦中、米国軍事機関に採用されたLL (Language Laboratory)はその効果の大きさから、戦後、米国の大学等に広く普及した。日本で初めてLLを導入したのは南山大学で、1952年のことだった。中部地区では2例目となった名古屋学院大学や、南山大学の歴史ある実践例に学び、1970年代、本学でも音声でのアウトプットを重視した英語教育が始められた。当時のLL関係の学会誌には、すでにその頃「読む・書く・聞く・話す」4技能習得を要求する時代が始まったと記されている。

本学ではもう1つの挑戦も始まっていた。LLでこそ実践できるビデオ付きオリジナル教材の開発である。オハイオ大学(OU)から派遣されていた講師陣の協力を得て、オーラル・アプローチやパターン・プラクティスを軸とした教材「It's Up To You」(1980)が制作された。

LL導入当初、センターの主任であった岡田 堯教授(故人)は、「It's Up To You」のビデオの中でも、英語教師役を演じている。明治生まれの英語教師・岡田氏は、本学へ着任するまで名古屋市内の高校で校長を務め、愛知県下の公立高校としては初めて豪州への交換留学制度を築いた人だった。実は私も岡田氏が整えたこの制度のもとで留学した1人である。本学の語学向上に情熱を注いでいた岡田氏は、留学生の集いなどで会うたびに、山田和夫学長(故人)のもとでLLを活用した英語教育に取り組んでいること、「使える」英語の教育実践について熱弁していた。それから数十年後、私がこうして

LL更新の節目に関われたことには、恐れ多さと感慨深さが入り混じる。

本学の語学環境の軌跡

国際関係学部、経営情報学部が誕生し、中部大学となった1984年、外国語研修センターは語学センターに改称された。今日までの30年余りの間、語学センターが携わってきた主な取り組みは次の通りである。

1984年

20号館4階にLL教室(SONY LLC-3000・64席)増設

1987年

語学センターが19号館2階へ移転(現192D教室)

19号館2階にLL教室4部屋設置(SONY LLC-5500・各36席)

語学教育へのパソコン導入開始

1988年

SI Room (語学専用自習室)開設

1990年

OPELT設立

1991年

OPELTによる英語教育開始

1992年

SI Roomにパソコン設置(OU協力)

1994年

インターネットを活用した英語教育開始(学内LANへの接続)

1996年

語学メディア教室(現204A教室/SONY LLC-2000・41席)開設

LL教室4部屋(SONY LLC-900・36席)更新

自習用語学メディアラボ(現204B教室・20席)開設

1998年

PASEO開始

2009年

204A 教室更新(LL 設備、AdiLL-1000 増設)

2011年

語学センター移転(SI Room隣室へ)

2013年

LL 教室(192A/AdiLL-1000・41 席)

CALL 教室(192D/内田洋行PC@LL-MT・47 席)

多目的演習室(192B/192C・可動式個別座席・42 席)

SI Room (=Self Instruction Room) は、語学センター長であった丹羽義信教授(当時)が語学は「学習者が自ら一歩を踏み出し、自らの意志で学ぶことが重要」と主導し、設立されたものである。ここには、1988年の開設時から書籍・雑誌教材のほか、CAI (Computer Assisted Instruction)、スピーチトレーナー、映画クローズドキャプション、衛星放送受信等、多角的な自主学習環境が備えられていたが、現在でも語学専用自習室がある大学は、全国的に希少である。

1990年にOUとともに創設した英語教育プログラム「OPELT」(Ohio Program for English Language Teaching)として、語学センターには5人の専任外国人講師が配属された。翌1991年、OUでのOPIE (Ohio Program of Intensive English)を土台としたオペルトアワー、オペルトセミインテンシブコースが本学のニーズに合わせて始まり、1998年の人文学部の開設、海外大学院

留学制度の開始を機に、PASEO (Preparation for Academic Study in English Overseas)へと発展した。

1994年には、全国の大学の中でも先陣を切った形でインターネットを活用した英語教育が始められた。学習素材の多様化とともに学習目標は「発信型」へ、学習形態は従来のブロードキャスト型からインタラクティブ型へとシフトしていった。ホームページやメールを活用し双方向性を重視したプロジェクト型英語教育実践を、他大学に先駆けて実践していた本学の全学対象科目「情報英語」は、1998年、大学英語教育学会(JACET)賞を尾関修治、塩澤 正、今村洋美、青木由香里(敬称略)、小栗が受賞している。

これからの語学教育へ向けて

17年間愛用されたLL設備は、残念ながらメーカーの生産自体が停止され、年々維持も困難になってきていた。2011年度末、今日のニーズに適した語学の実現をめざし、後藤俊夫副学長を主査として「LL更新後の授業利用検討ワーキンググループ(WG)」が構成された。語学センター、全学英語教育科、英語英米学科、外国語教育科、日本語教育センターの語学担当者、事務部門からの代表から成るこのWGでは、語学教室の活用方法をさまざまな角度から検討、教室のあり方について議論を交わした。

WGでの議論を土台に更新された語学環境は、4種類。LL・CALL・多目的演習室・語学メディア教室である。語学実践に必要な視点を、機器の選定や配置に活かしていただくことができた。全ての部屋を同じ形ではなく、CALL、LLそして多目的演習室にする計画となったのには、語学教育的理由があった。

CALL教室の外観は、パソコン室と似ているが、その中に詰め込まれ

ている機能は、音声・動画教材の配信、録音回収など語学を支援することを専門としている。LLでもCALLでも、音声を重視し、個別・反復学習を行うことができる。しかし、最大限の機器を配備したCALLがどの語学にも最良であるかといえ、そうではない。CALLでは専用教材の利用、ネット活用といったブレンド選択肢が増える。しかし、学習内容、教授法によっては、PCが不要であったり、モニターがただの壁となってしまったりすることさえあり、LLが最適だという場合がある。語学指導の内容によっては、特に機材の存在がかえってマイナスになってしまう場合もある。水平に収納可能な個人机と椅子を置いたことにより、多目的演習室はコミュニケーション演習がしやすい、レイアウトの自由度が高い教室となった。

「使える英語」の習得に向けて、本学に語学専用の教室が整備されてから35年。語学習得の目標やニーズの幅、入学時の学生の英語力差は拡大し続けている。多様な習得目標や価値観に即して、語学環境や学習方法を選べること。今春の教室環境の更新は、語学設備のオプションを拡大しただけでなく、学生が場所や時間を選ばず学習することができる英語e-learning教材の導入も実現した重要な一歩となった。こうした環境を活かして語学習得の支援をいかに充実させていくかは、ここでどのような実践をしていくかにかかっている。機器や教材を備えた環境の用意だけでは、語学力向上は達成できない。新たな環境を活かし、どのような教育実践に努めていくか。それが設備更新とともに私たち「人」に与えられた大きな課題であろう。

語学センターホームページ

<http://www3.chubu.ac.jp/lc/>



オープンしたCALL教室